



めざせ、トラブル！

技術はどんどん進化して、印刷物はますますキレイに刷れるようになった。突然的なトラブルは影をひそめ、想像を超えた結果に出会うことなくなってしまった。このことが印刷に粹を感じる作り手たちに、一抹の寂しさを感じさせている。だから今回、仕掛けたトラブルで、予想外の世界を予想通りにつくってみた。

祖父江 慎

ABOUT TRIAL

トライアルについて

●トライアルの背景

印刷がアナログだった時代には、ビックリするようなことがいっぱい起こっていました。たとえば、予想とまったく違う製版が上がってきたことがあります。たぶん指定を取り違えたのでしょうか、それが場所によってはものすごくいい効果を発揮していて、採用したことがあります。ピンクとグリーンの版があべこべになって、鮮やかな部分が逆にすごく濁った色になったこともあります。でもそれが思いがけないほどカッコよく、大筋は逆転したままで進めたこともあります。コンピュータになってからも製版でバグが生じて想像を超えた版ができたこともあります。なぜそうなったのか製版の人もわからなかっただけれど、僕の指定したものよりも断然面白いものだったので、そのバグ製版をベースにしたこともあります。

とにかくちょっと前まではいろいろなことが起こっていたんです。もちろん、思ってもいらないようなことが起きるとよくない結果のほうが多いのですが、ごくたまに想像を超えたカッコいいものができます。自分のイメージとは違うけれど、強烈にいいこともある。印刷には、デザインする人、製版の人、刷る人といろいろな人が介在するので、そこで勘違いが起こったり、プラス思考が掛け合わさりすぎてとんでもない方向に行っちゃったり、共同作業のモノづくりならではの出来事が起こるんです。だからいつも色校が出るのをワクワクして待っていました。

●制作コンセプト

最近は、そういうことがどんどん起こりにくくなっています。きちんとしすぎで、「ビックリ」がなくなってしましました。思った通りだとあまり感動がない、つまらない。自分のイメージのなかだけものができてしまうことがどうにも退屈なんですね。

印刷技術の向上もあって、トラブルもおおよそ予想



がつくようになっています。そのせいか、刷りものに味わいがなくなってしまっている。それがちょっと悲しいです。それだけに手や身体を感じるものを作りしようとすると、逆によけいなフィルターを通していけなくて、データ上でたいへん面倒な作業をしないとならなくなりましたが、ともかく、予想がつかないような不安定さをベースに面白いものをつくりたいと考えました。

コンセプトは「めざせ、トラブル！」。最近ではあまり起らなくなっているけれど、印刷所に実際あるトラブルや、失敗しやすいから注意している要素などをいい具合に持ち込んで作品にしたら楽しいかな、自分では思いつかないように作品ができあがっていくのを見つめていきたいな、と思ったんです。

自分で考えるものはだいたいが予測できる範囲にあって、ルール化されてしまっています。プランニングできない予想外のものって意外と結構カッコよかつたりするものです。論理的には破綻しても、視覚的にすごい力を持っていたりします。さらに気分とか湿度とか味覚とか、視覚以外にも訴えてくるような計算できない部分を加えて、レイアウトや構図以上に“感じられる”ポスターをつくることにしました。

—— 祖父江 慎

カレー印刷

「食材をインキ代わりに印刷しました。ポスターといえば普通はグラフィックを楽しむものですが、匂いや湿度など日々の暮らしのなかにある“気分”をそのまま刷ってしまおう、という実験です。どこの家の台所にでもあるもので実験したら、刷ることは刷れたものの、ものすごく色が薄いし、匂いもすぐに飛んでしまう。最終的にはスパイスのツップツップ感が楽しくて、誰でも食欲がわいてきそうなカレーにしました。ターメリックやレッドチリペッパーをインキ代わりに刷った“カレー印刷”です」

食材で印刷する

日常的な食材を使った印刷。はちみつ、カレー粉、マヨネーズ、わさび、ココア、インスタントコーヒー、小麦粉……。どのくらい色が出て紙に定着するかを検証。そのままでは使用できないため、メジウムで濃度や粘性を調整した。



はちみつをメジウムに混ぜる祖父江さん



左より、カレー粉、コーヒー、ココア。ともに10回刷り。インキの層が薄くなかなか色が出なかった

カレー粉で印刷する

最初の実験の結果から、カレーに的を絞った。カレー粉を構成するスパイスを、CMYK4版に振り分けた。赤はチリペッパー、黄はターメリック、黒はブラックペッパー。青いスパイスはないので青汁の粉末を使用。各色6回刷り。



各インキの色（右側の帶部分）は、左より、ブラックペッパー、青汁、チリペッパー、ターメリック

用紙は左より、ダイヤプレミアグロースアート、ルミネッセンス（マキシマムホワイト）。印刷直後はバステル調の美味しそうな色をしていたが、間もなく緑色に変色した。用紙違いによる色の変化の差も大きい

アートディレクター 祖父江 慎 × プリンティングディレクター 金子雅一

キズ印刷・ムラ印刷

「印刷がうまくいかなくて、かえって味わいが出ることがあります。昔はよく見かけた色ムラもその一つ。以前、インキがかされた感じで印刷したいと頼んだら、「かすれた状態のデータをつくって、それをきちんと刷らせてください」と言われたことがあります。そこで今回は、印刷時の湿し水が必要以上に多い場合に起こる“水負け”というトラブルを使うことにしました。さらに、出力した製版フィルムに手を加えたり、刷版を焼き付ける時にピンボケを起こさせる方法でも実験することにしました」

“焼きボケ”と“水負け”

①まずは製版で“焼きボケ”をつくった。データをフィルムに出力して刷版に焼き付ける製版の工程で、フィルムと刷版をわざと密着させないでピントをぼかし、ムラを生じさせた。②次に印刷時に“水負け”を発生させた。水と油の反発作用を使うオフセット印刷では、印刷の際に版を水で少し湿らせるが、このバランスを崩し、刷版を水浸しにして色ムラを引き起こさせた。



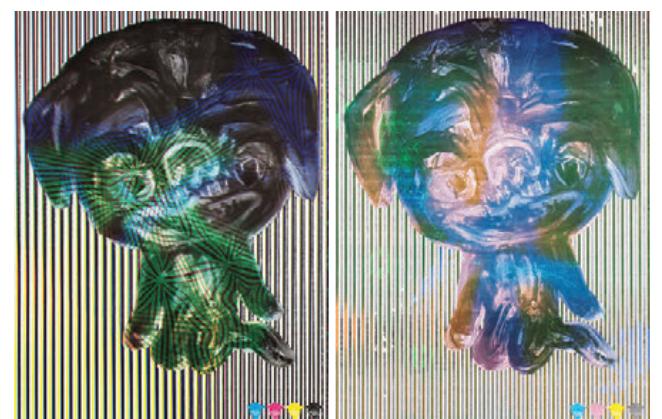
左より、通常通りの印刷、①焼きボケをつくった印刷、②さらに水負けを起こした印刷

フィルムを傷つける

CMYK4色に分解したフィルムでさらなる“ムラ”を目指した。③強い熱を加えて変形させたフィルムを使い、焼きボケをつくる。④漂白液によって絵柄を消す。⑤金ダシでこすって絵柄に傷をつける。



金ダシでフィルムを傷つけている様子



左より、③+①の印刷、④⑤+①②の印刷。色の掛け合わせに破たんが起きたり、版ズレが起きている

劣化印刷

「以前、ニス掛けせずに金のインキを使った本が、しばらくしたら化学変化で古い仏像のような侘び・寂びの世界になっているのを見た。時間の経過を感じられるものつくろうと、劣化する印刷を考えました。通常、金インキには酸化防止剤が添加されていますが、それを添加しないインキを用意して錆びさせます。さらに、素早く激しく酸化させるためにクエン酸や酢醤油でいろいろ手を加えてみました。でも想像以上に“劣化”は手ごわい。つまり、それだけインキが素晴らしい安定している製品だということですね」

インキの上から クエン酸を刷る

まずは、酸化防止剤無添加の特注インキを刷った上に、クエン酸を混入したメジウムを刷り、クエン酸による酸化促進を狙った。祖父江氏が開発に携わったメタリックな光沢がある紙“コズピカ”を使用した。



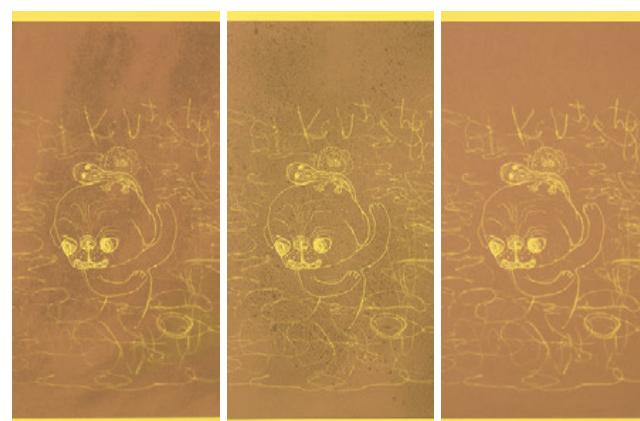
印刷後、酢醤油で湿らせて変化がみられた



左は特注金インキのみ、右はその上からクエン酸混入メジウムを刷ったもの。目立った変化はなかった

酢醤油で酸化を促す

真鍮を錆びさせる酢醤油を使って次の方法を試した。①酢醤油を染み込ませた用紙を乾かして特注金インキを刷る。②特注金インキを刷った上に酢醤油をかける。③特注金インキに酢醤油を混ぜて刷る。用紙は、祖父江氏が以前造本で使用したところ、金インキの印刷面が変化したという色上質（黄）で試した。



左より、①、②、③。効果が顕著なのは、印刷後に酢醤油をかけた②だった

シミ印刷

「最近の紙でちょっと不満なのは、不透明度を大切にしそうのことと、表裏が均質になりすぎていることです。紙の下に置いたものがそれなりに感じられるのも、裏と表で触り心地が違うのも、紙の楽しい部分ではないでしょうか。そこで、透かしインキを使って天ぷらの敷き紙のような油染みをイメージして、濡れて透けてしまったような印刷をつくることにしました。いろいろ紙で実験して、部屋に飾ってあるだけでベタベタ、ジトジト、デラデラしてくる湿度たっぷりなポスターをつくります」

透かし効果を確かめる

透かしインキを重ね刷りして、その効果を確かめた。刷り回数は1回と3回。透かしの効果が現れそうな薄い用紙（5リーフ、OKプリザード）を使用した。



左より、1回刷り、3回刷り。用紙は5リーフ。刷り重ねた回数が多い方が透かし効果も大きい

透かし効果を高める

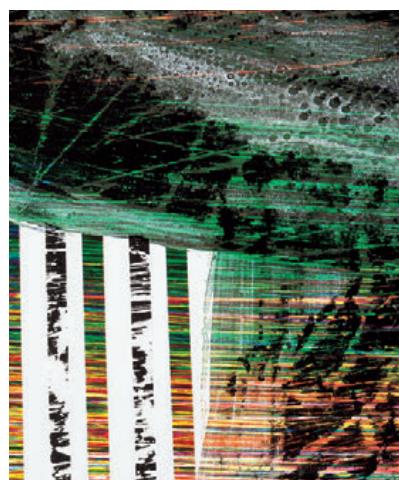
次に、透かしインキ用の版は画像を反転した版も作成し、表裏両面から刷って効果を高めた。透明・不透明の差異を際立たせるために、さらに部分的にグロスニスを印刷。透かしインキで印刷しなかった部分にはオペークホワイトを印刷した。



ハイメノウ（プレーン）が最も透かし効果が高かった。グロスニスやオペークホワイトも効いている

FINISH

全作品とディテール



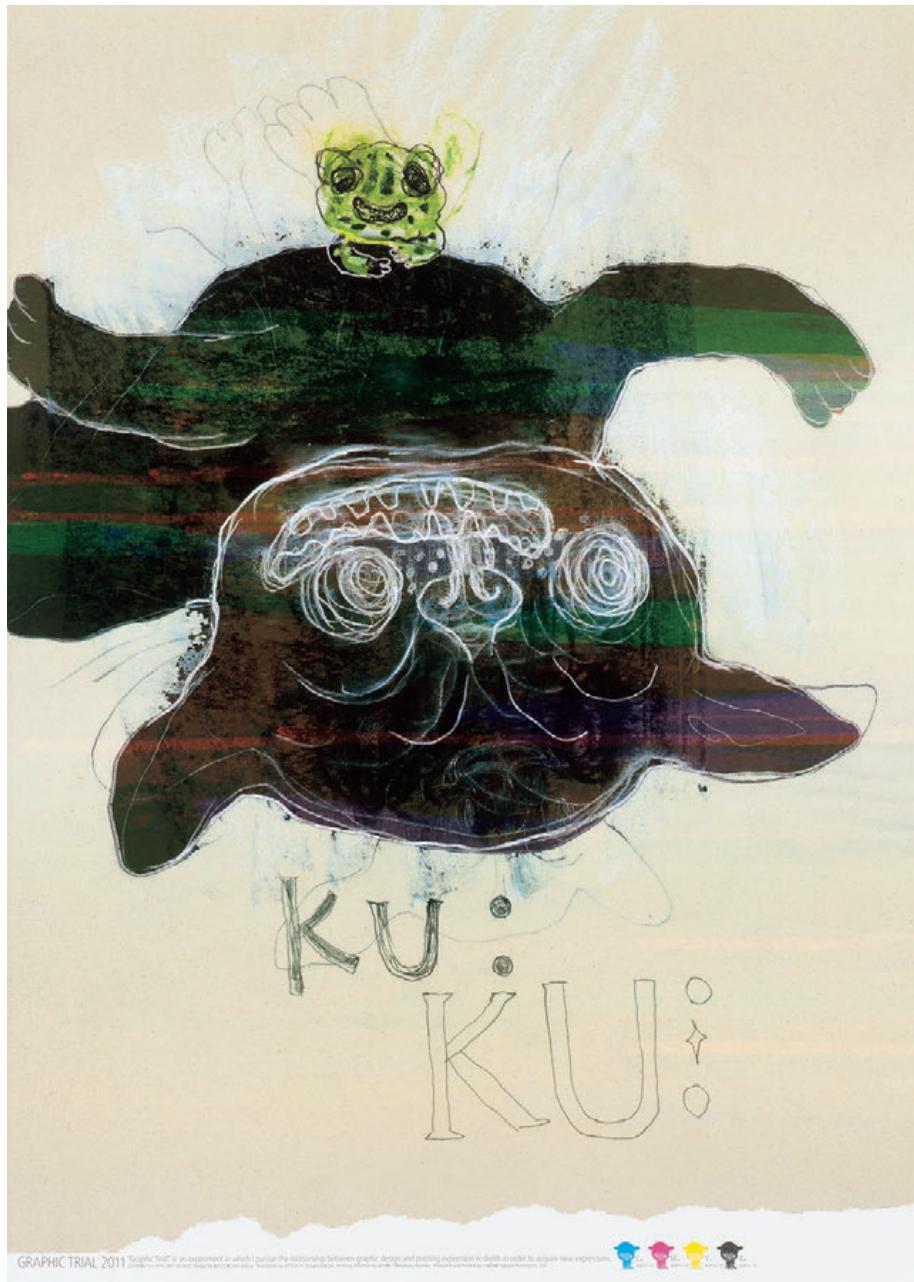
Art Direction & Design : 祖父江慎 / Illustration : さくたえっこ



用紙: ヴァンヌーボV / スノーホワイト 四六判 150kg
版の構成: シアン→マゼンタ→イエロー→ブラック



用紙: ダイヤプレミアグロスアート 四六判 135kg
版の構成: ターメリック(グロスニスに混入)→チリベッパー(グロスニスに混入)→青汁(グロスニスに混入)→ブラックペッパー(グロスニスに混入)
※展示作品は仕様が異なる場合があります



GRAPHIC TRIAL 2011 "Graphic Trial" is an experiment in which I pursue the coexisting between graphic design and printing expression in depth in order to acquire new expression.



用紙: ユーライト 四六判 135kg

版の構成: ブラック→シアン→マゼンタ→イエロー ※すべてのインキにオベークホワイト混入



GRAPHIC TRIAL 2011 "Graphic Trial" is an experiment in which I pursue the coexisting between graphic design and printing expression in depth in order to acquire new expression.



用紙: コズピカ / クロ銀 四六判 86kg

版の構成: オベークホワイト→赤金(酸化防止剤無添加、酢醤油混入)→銀(酢醤油混入)→特色ブラック→酢醤油(メジウムに混入)



用紙:ハイメノウ / ブレーン 四六判 64.5kg

版の構成:透かしインキ(表)→透かしインキ(裏)→オベークホワイト→スーパーシルバー→グロスニス

AFTER TRIAL

トライアルを終えて

●トライアルを終えて

なんといっても、こんなにもトラブルが起きにくいとは。本当にビックリしました。

久々に使った製版フィルムも、昔よりずっと強くなっていました。たわしでこすってもキズつかないし、雑巾のようにぐちゃぐちゃにしても切れない、割れない、破れない。インキも本当に強かった。酸化防止剤を抜いても、酸を混ぜてもピクともしません。あんまり錆びないので、最後は紙にもインキにも酢醤油を混ぜたくらいです。2~3年後にどうなっているか……。ちょっとドキドキしながら楽しみに待つことにします。

インキについてはもう一つ、こんなに濃いものだったなんて、あらためて驚かされました。実は「赤いものを刷れば赤くなる」などとゆるく考え、食品で刷ることを思いついたのですが、真っ赤なケチャップも、濃いコーヒーも、味噌も醤油も何度も刷り重ねてもなかなか色が出てきません。そういういえば印刷機のインキ壺の中はまっ黒に見えたっけ、と納得。やっぱり、インキの強烈さには脱帽です。

水負けはプリントディレクターのアイデア。金子さんはイメージや感覚を共有しながら、経験を生かして一緒に面白いこと、楽しいことを目指してくれる稀有な存在。今回もアイデアをたくさん頂きました。

今回の作品は、どれもが刷ってみるまではどうなることやらわからないものばかりでした。まるで格闘技のように印刷と組みあった感じです。そうして今、やっぱり僕は予測できないことが好きなんだな、としみじみ感じています。久しぶりに色校を待ちながらワクワク気分を味わいました。印刷物は、刷ってしまえば良くも悪くもそれが結果として定着します。生まれちゃった以上はもうどうしようもないという、悔いも喜びも全部がものとして定着してしまうところが、なにより粹で素敵なところです。

——祖父江 慎



●プリントディレクターから

現在、印刷で発生するトラブルは、実はかなりわかりづらいものです。今回、我々が望んだような派手なもののはまず有利得ないし、やろうとしても簡単には起きません。つまり、今の印刷機もインキも紙も良くてできているということです。特にデジタルに移行してからは、人の手が介在しなくなった分、機械も格段にシビアになって間違いを起こさなくなっています。

悪戦苦闘しながらも、ようやく光が見えてきたのは、腰を据えてトラブルを起こそうと覚悟を決めて力技に走ってからでした。印刷機に水をまき、フィルムを考え得る限りの方法で傷めつけ、紙もインキも酢醤油浸しにして、初めてわかりやすいトラブルができました。

完成した作品は、まさにトラブルのオンパレード。これだけいろいろな事をやって、それを材料にうまいことデザインしてしまうとは…。あらためて祖父江さんのものをつくる力を思い知らされました。最初は「気分を印刷する」とか「雑巾のような印刷をしたい」とか、ワケのわからない話だったのですが。周りに“もや”を撒き散らしておいて、それを自分なりに晴らしながらものをつくりあげていく人なんだな、と思いました。

——金子雅一